

## ラトナーカラシャーンティ 『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(3)

望 月 海 慧

### はじめに

前号<sup>1</sup>に引き続き、本号ではラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』の第七章の和訳を提示する。『経集』の第七章の主題は、「菩薩を傷つける業障と魔の業と軽蔑の心と正法を捨てることなどの中断の法を完全に捨てる衆生はとても得難い」と言うものである。菩提心を護る在り方を解説するために、それに対立する菩提心を損なう原因を述べた経典が引用されている。その概要を示すと次のようになる：

#### 1. 忿怒

##### 1.1 それぞれの人

『信力入法門経』

##### 1.2 菩薩の律儀との関係

『弥勒獅子吼経』

##### 1.3 怒りが傷を引き起こす

『文殊神通遊戲経』

---

1 望月2006. 津田明雅博士(京都大学)より、『新国訳大藏经』所収予定の「大乘宝要義論 解題」の草稿をお送り頂いた。『経集』引用経典の典拠など、多くの情報をお教えいただいたことに対してここに記してお礼申し上げます。またナーガールジュナの『経集』、シャーンティデーヴァの『集学論』、ディーパンカラシュリージュニャーナの『大経集』所収の引用経典の一覧と索引については、Mochizuki 2006を参照。

ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(3) (望月海慧)

1.4 善根を尽くす原因

『月灯三昧経』

1.5 浄化の利益

『入定不定印経』

『信力入法門経』

1.6 菩薩の特徴

『入定不定印経』

2. 正法を捨てること

『般若経』

3. 魔の業<sup>2</sup>

3.1 魔の業による損害

『般若経』

3.2 分別をもつ者に魔の業が生じること

『文殊神変経』

3.3 魔の業が何をなすのか

『文殊神変経』

4. 輕蔑の心

『海慧菩薩所問経』

5. 中断の四法

『海慧菩薩所問経』

ラトナーカラシャーンティによる本章の解説の特徴としては、数字の転数と

---

2 本章における「魔の業」については、一島1990cを参照のこと。また本テキストの著者と同じくディーバンカラシュリージュニャーナの師であるボーディパドラの『三昧寶粗論』には、「捨てるべきもの」として「魔の業」が言及され大乘經典とタントラ經典などが引用されているが、そのうち『文殊神変経』の引用が本論における最初のもとの一部重なっている。Cf. 望月2005b, p.57, 望月2006b.

各数<sup>3</sup>に関する言及がある。『信力入印法門經』の「無量」の解説において『俱舍論釈』における60の各数の列挙を引用するだけでなく、『入定不定印經』の「不可説の不可説」の解説において『華嚴經』を引用する。ナーガールジュナの『経集』におけるコンテキストでは、菩提心を損なう原因としての忿怒が述べられており、その解説において数字の桁数を詳細に論じるような必然性はない。それ故に何らかの特別な意図がそこにあったと言うよりも、注釈者の博識がここで披露された程度のものであろう。そのうち後者において列挙されるのは7の基数<sup>4</sup>と109の各数と20の転数の合計136の桁数である。この数に関しては、『翻訳名義大集』では『華嚴經』<sup>5</sup>「阿僧祇品」の124と「入法界品」<sup>6</sup>の132、『ラリタヴィスタラ』<sup>7</sup>からの33、『俱舍論釈』からの60種の数をあげている。<sup>8</sup>「入法界品」ではこれらの記述は第7章と第12章に見られるものの、全体数にも順番にも相違が見られる。『経集釈』のものはこのうち『華嚴經』の両品のチベット語訳(136)に一致するものの、両品の漢訳ならびに「入法界品」のサンスクリット(124)とは数が一致しない。<sup>10</sup>これらの大きな桁数は実用的な

3 インドにおける数表記法については、林1993, pp.1-14を参照。同書によると、以下に取り上げる大きな数に対する表記は、ヒンドゥー教文献、ジャイナ経文献の中にも相違がある。インドの数学については、楠葉1997, 矢野1980, 1987を参照。

4 Mvy, Nos.8050-8056: eka (gcig), daśa (bcu), śata (brgya), sahasra (stong), ayuta (khri), lakṣa ('bum), niyuta (sa ya).

5 Cf. 末綱1957, pp.72-73, 李2001, pp.629-632.『華嚴經』における数学的記述については、Koyama 1961, 1964, 兎山1961, 1962もあるが、この桁数に関する分析は行われていない。

6 ただし『翻訳名義大集』のチベット語訳は大蔵經収録の『入法界品』のチベット語訳 (tr. by Jinamitra and Ye shes sde, etc.) とは異なっているものが多い一方で、『経集解説』の引用文のチベット語訳は後者と一致することから、前者が現在伝わっている『華嚴經』のチベット語訳とは異なるチベット語訳テキストからデータを取ったのであろう。また本テキストおよび『入法界品』のチベット語訳については、辞書などに拾われていない語が多く、そのサンスクリットを想定することは困難である。TSDは『入法界品』のサンスクリットと対比してそれを試みているものの、サンスクリット版とチベット語訳の項目数の相違を意識していなかったのか、前半において『翻訳名義大集』との順番の相違が生じ、また後半のものについては推定を行っていない。

7 外齒1994, pp.572-575, 910-911.

8 榊1981, pp.495-513.

9 兎山1994, pp.184-186, 226-228.

10 すなわち12項目については、そのサンスクリットを推定することが困難である。

ものではなく、概念上の数目でしかなく、実際に使用されることはなかったであろう。それ故に数目の伝承過程において相違が生じたとしても、それは単に記憶の相違程度のもので、実質的な相違を伴うものではない。

さらにラトナーカラシャーンティに特徴的な注釈として、最後の『海慧菩薩所問経』からの引用に対する解説において、聖經が正しい認識根拠になりうるのかということに言及している。その回答は、『プラマーナ・ヴァールティカ』などを引用した上で、「聖經を正しい認識根拠とするべきである」と言うものであり、經典のアンソロジーに対する注釈書としては、ごく当然の答えになる。

## 『経集解説・宝明莊嚴論』和訳 (承前)

### 第七章 「菩薩に対する過失を引き起こす業障と魔の業と軽蔑の心と正法を捨てるなどの中断の諸法を完全に捨てる衆生はとても得難い」

そのように菩提に発心してから<sup>11</sup>、今度はその菩提心自身を損なうことなく護る在り方を解説すべきである。そこで損なう原因とは、対立する主張である。その如くなので対立する方向<sup>12</sup>を捨てることを述べるべきであり、人における忿怒と、正法を捨てることと、魔の業と、軽蔑の心と、中断の四法は、対立する主張である菩薩の律儀と関係している。根本過犯を説いたものは、ほとんど菩薩の律儀と関係していない<sup>13</sup>。律儀と関係していないものが何故に説かれているのかと言えば、大過の特徴を説くことにより他の目的が起こされるから。それ故に菩薩の律儀と関係する対立する方向を中断する法を捨てることを説い

11 『経集』の第五章が「菩提心は得難い」であり、第六章は「悲心は得難い」とある。

12 D: 'dir nyams pa'i rgyu ni mi mthun pa'i phyogs so//de lta bas na mi mthun pa'i [P. om.] phyogs.

13 D: ma 'brel pa [P. om. ma].

たのが、「これらによっても」などと言われる。それ自身を詳しく解説したものが、「それに対して」などと説かれている。「傷を引き起こす」損害は、「菩薩の律儀を備えることで菩薩に相応しいものに対する過失がここに成立する」と言う意味である。「律儀を損なう人にも成立する」と言われる。ある者たちは、「得たものをまだ損なっていない者に」と主張する。「何故ならば一切の学ぶべきものに共通な特徴なので、他のものにも過大になってしまう」と言う。その如くではない。後にもそれに対して「山羊の車のようなもので行く菩薩と象の車のようなもので行く者たちは損なわれている」と出ているからであり、また「ありのままに適切なもの」と言う声と、聖經にも、垢と叱責の喩例により説かれているから。

## 7.1 「信力入印法門經」<sup>14</sup>

では、優婆塞などは何故に解説されるのかと言えば、中位の過失として説かれるので対象となる菩薩は、とても重い過失とそれ以下のものも捨てているので過失はない。そのうち「衆生たちの善根」とは、殺生を捨てることなどの白法である。「他の師に頼らない」とは、三帰依を受けているからである。「善根」とは、人と天を成就させる原因にある。「比丘」は、白四羯磨により具足戒を受けている。「善根」は、涅槃の原因に向かうことをなすものである。「信による隨行」<sup>15</sup>とは、人を信解することにより入ることである。「法の隨行」とは、自分の智慧を最高とすることである。「第八番目」<sup>16</sup>とは、異門の第八番目である。「預流」とは、見道を得ることである。「一來向」とは、欲界における生を一度残している。「不還向」とは、欲界の生を尽くしている。「阿羅漢」は、有の頂の捨てるべきものも捨てている。「独覺」は、縁起性による考察から結果

14 *Śraddhābālādhanāsūtra*. Tib. P. No.867, Tsu 63a8-b5, Chin. No.305, pp.956b2-958b6. Cf. Sik, p.51, P.11ff.

15 *śraddhānusārin*. Pāsādika 1979, pp.43-44, note 96.

16 「第八地の者」のことか？ Cf. Pāsādika 1979, p.44, note 97.

を得ている。「山羊の車<sup>17</sup>のようなもので行く」と「象の車のようなもので行く」とは、それぞれの人を説いている。<sup>18</sup>「月と太陽のようなもので行く」とは、それぞれの人を説いている。<sup>19</sup>「声聞の神変のようなもので行く」とは、初地から第七地までの間である。「如来の神変のようなもので行く」とは、異熟の地によりまとめられる。そのような場合にそれぞれの人を説いてから把握され、最初の無量劫は速いものに関してである。初地から第七地までに説かれる<sup>20</sup>ものが、確実に堅固なものに関してである。第八地から第十地までの間は、とても遅いものに関してであり、そのように三無量劫として知るべきである。速いものを説くことでとても速いものが存在するのと言え、そうではない。例えば底沙如来に釈迦如来がなした禁行により住して、一偈により賞讃すること<sup>22</sup>のようなものによっても多劫にわたり調和することを尽くしても、無量なのは誰も調和することはないから。

それぞれの人を説いたことについて、これをどこでなすのかと言え、ある者は、「入智慧分 (nirvedhabhāgiya) においてなされる」と言う。ある者は、「資糧によってから把握される」と主張する。ある者は、「忍を得てから」と主張するが、ここでは最初に示された発心たるものからと認められる。他の場合には聖アサンガが、

信解行地の者にはすべてのものも堅固ではない。<sup>23</sup>

と説かれているから。劫とは、大劫と認められる。「無量」とは、60の数の処

---

17 テキストは「山羊車 (ra'i shing rta)」であるが、『経集』は「家畜車 (phyugs kyi shing rta)」とある。

18 P: bstan pa [D: *brtan*]. 続く注記のように、北京版とテルゲ版の間に読み方の違いがある。

19 P: bstan pa [D: *brtan*].

20 P: bstan pa [D: *brtan*].

21 D: *brtan* pa [P: *bstan*].

22 Ekagāthā, Tib. D. No. 323, P. No.989. Cf. *Abhidharmakośakārikā* 4.112 and-bhāṣya, Pradhan 1967, p.267.13, 舟橋1987, p.483, 本庄1984, pp.70-71 [99], Pāsādika 1986b, p.91, [351].

23 典拠の確認はできていない。

に至るものとして認められる。何故に「無量」と述べるのかと言えば、次のように数の特殊な名称は『俱舍論』に説かれている。

数は、転数と各数とである。そのうち転数は、一と十と百と千と万と十万とラクシャとコーティとマディヤで、九処である。各数は三種であり、アユタとナユタとプラユタとキンカラとビンバラとアクショープヤとヴィヴァーハとウトサンガとヴィハーナと言われる九であり、九つの大を加えたもので最初の各数である。ティティバとヘートゥとカラバとインドラとサマープタとガティとニンバラジャとムドラーとバラであり、九つは前の通りに九つの大を加えたもので第二の各数である。サンジュニヤーとヴィブータとバラークシャと言われる三つが、前のように三つの大を加えたものにより第三の各数である。そのように九つの転数と三種の各数と数えられる42で、まとめると51がアビダルマに見られる。さらに八つの数が文献には見られないが、各数として八つを加えれば59が数の名称として設定されており、第60番目は、そのような名称から説かれているので「無量」と言われる。<sup>24</sup>

と軌範師ヴァスバンドゥにより解説されている。そのうち、「信による随行」などの善根は、それぞれのそれ以上の結果を得ると認められる。<sup>25</sup>「阿羅漢」は、他を所縁としている。「独覚」は、二を所縁としている。「菩薩」は、仏と衆生の利益を求めることで特別に作られた善根の適切なものである。ここで善根は布施と戒と修習から生じたものである。「怒り」とは瞋恚である。「輕蔑」とは、侮辱することである。他の喩例により説いたものが、「ある者は」などと言われる。「衆生」とは、誤ったものへの執着をもつ者などである。「菩薩」とは、初学者で大乘への信解のみが存在する。「責める」とは、言葉により罵ること

24 *Abhidharmakośabhāṣya*. Pradhan 1967, pp.181-182, 山口1955, pp.464-465. Cf. Mvy 7988-8048.

25 P: 'bras bu *gong ma* [D: *gang ma*] thob par.

である。「八」とは、戒を損なうなどにより過失を責められることである。「傷つける」<sup>26</sup>とは、棒と武器と土塊などで打つことである。その縁からいかなる結果が領受されるのかと言えば、「ある者は」と述べられる。「何れかの適切な縁」とは、戒と生活を損なうなどの縁による。「侮辱する」とは、衆生を成就させる特殊性である。「責める」とは、前のように口の特异性である。結果性を異熟する結果が、「大叫地獄」と言われる。大叫は、別の数処の第五番目の名称である。苦はどのように領受されるのかと言えば、「身体は五百由旬」などと説かれている。苦性を示したのが、「鉄の鋤が焼く」と述べられる。ここにある者たちは、「侮辱して責めた結果であるが、それ以上の結果ではない。残りのものもそのように知るべきである」と主張する。「三千の大千の」とは『俱舍論』に]

四洲と日月と妙高山と欲天と梵天の世界の千が小千であると認められる。

そのうち千は二つの千があり、中の世界である。その千には、三千があり、等しく壊し、生じるものである。<sup>27</sup>

と言われる。「大乘性から基本を受けた」とは、「大乘は仏の言葉ではない」と捨てられる。過失が生じる原因の特徴は、「それは何故にか」と言う問いに対する答えとして「如来は」<sup>28</sup>と言われる。原因を捨てることで結果が制圧されるので、如来に対して害をなしているので菩薩に対して害をなすことは大過とはならないので「そうではない」と言う意味である。「大乘は、仏のお言葉ではない。經典に入らず、律に見られない。法性に矛盾するから」などと述べられているので、「誹謗する」のである。円満ではないものをなし、論難されるので、「捨てられる」。人を誹謗することをどのように捨てるのかと言えば、「法は他なるものではない」などと言われる。「法と人は異なるから」と言

26 Tib: *nyams pa*, but SS *nyam nga bar byas*.

27 *Abhidharmakośakārikā* 3.73-74. Pradhan 1967, p.171, 山口1955, pp.425-426.

28 P: *de bzhin gshegs pa rnam* [D: *thams cad*].

う意味である。「ジャンプー洲」とは、木の区別から命名されており、六千五百由旬と四つの中の小さな洲の名称である。「類似する適切なもの」とは戒であり、「それぞれを破る場合も」と言う意味である。「それぞれの人」と述べられている。これらの喩例は、世尊が衆会の想を意図してから様々に説かれているが、考察された区別によるのではなく、「一切の中から初学者だけに対してである」と述べられる。

## 7.2 「弥勒獅子吼経」<sup>29</sup>

これらの過失が菩薩の律儀と結びついて何が明らかになるのかと言えば、「『聖弥勒獅子吼経』にも」と説かれている。初学者である者に何が明らかになるのかと言えば、「もしそれにより一切智が完全に捨てられないならば」と説かれているから。煩惱は種々ではないのか、何故に種々ではないのか、何故に怒りの中から傷が生じて傷つくのかと言うのならば、菩薩らは怒りのみから墮落するが、残りのものによるのではなく、彼は他のものを完全に捨てるだろうし、捨てた際に戒を破り善根を断じるからである。貪欲は彼にはなく、他のものを集めるだろうし、それ故に菩薩の所作は、他のものを完全に集めているので最高である。聖經にも、

菩薩の過犯は怒りから生じる。<sup>30</sup>

と出ており、

また菩薩の過犯は二種である。すなわち、「怒りと無知」と出ていても、方法に巧みな菩薩は怒りを恐れ、方法に巧みではない者は貪欲の過犯を恐れる。<sup>31</sup>

と出ている。

---

29 *Maitreyasimhanādasūtra*. Tib. P. No.760 (23), Zi 80b4-7.

30 現時点で典拠の確認はできていない。

31 現時点で典拠の確認はできていない。

### 7.3 「文殊神通遊戯經」<sup>32</sup>

怒りだけが傷を引き起こすことを説いたのは、「『文殊神通遊戯經』にも」と述べられる。ではそのように「忿怒」により善根が尽きることを例えば喩例で示しなさいと言うのならば、「菩薩の説法を歓喜する根に対して菩薩は勝者の智力により信じずに忿怒を起こすことで大地獄に墮ちる」と出ており、『入法界品』にも、

彼らはお互いに輕蔑する心の過失により寿命と光明と顔色から衰えている。<sup>33</sup>

と出ている。

### 7.4 「月灯三昧經」<sup>34</sup>

忿怒と輕蔑は善根を尽くす原因として明らかなので、それを説いたものが「『月灯三昧經』にも」と説かれている。そのうち善根は三種である。布施から生じたものと戒から生じたものと修習から生じたものである。そのうち布施から生じたものは、二種である。有益なものと功德の国土から生じたもので、布施と仏への供養である。ある者は、「布施をすることができないので財物に執着する」と言うのならば、その対治は仏への供養なので、「布施と仏への供養」と述べる。「戒」とは、戒から生じたものである。「聞」などは、修習から生じたものである。聞の意味を修習することは、身と心を雑音と分別から静寂にするので、「閑静処に住む」と言われる。

---

32 *Mañjuśrīvikrīḍitasūtra*. Chin. T. No.817, p.821b27-28, No.818, p.830a14-15.

33 現時点で典拠の確認はできていない。

34 *Candrapradīpasūtra*. 現時点で引用の確認はできていない。

## 7.5 『入定不定印經』<sup>35</sup>

そのように傷を引き起こす過失を説いてから、今度は、浄化の利益が説かれるので「そのように」などと説かれている。想が浄化されるので「慈愛」である。よい行は「眼を起こす」。「信解」は初学者である。「信」とは、淨信である。「回向」は、功德である。

## 7.6 『信力入印法門經』<sup>36</sup>

真実の了義の聖經が、「『信力入印法門經』に」と述べられる。「学ぶべきこと」は、五戒などである。そのうち劣った対境なので「優婆塞」である。時間か短いので「一日」である。劣った事物なので「食物」と言われる。少しなので「一」と言われる。法が無数であることについて、以前の対境が多いので「極微の数ほどの世間の界」と、時が長いので「ガンガーの砂の数程の劫」と、常なので「毎日」と、良い事物なので「天の食物と衣の布施により制圧される」と述べられる。如来を見るだけでも福德が多く広がるのは何故かと言えば、福德と知恵が究極に至るので、その結果は意味のないものではない。聖經に、

仏の声も意味のないものではない。<sup>37</sup> 涅槃の原因になるから。

と説かれているならば、色を見ればどうして成立しないのか。「僧」とは、魔などにより分けられないから。

仏と法と僧は、十億の魔によっても何故ならば分けられないので「僧」と言われる。<sup>38</sup>

と述べられている。「声聞」を述べたことは常住であるから。あるいは淨心の

35 *Niyatānīyāvātāramudrāsūtra*. Tib. P. No.868, Tsu 80b6-81a1, Chin. T. No.645, p.705a28-b10, No.646, p.710c7-16. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall p.521, 9ff.

36 *Śraddhābalādhānasūtra*. Tib. P. No.867, Tsu 62a2-63a8, Chin. No.305, p.956b2-957c20.

37 現時点で典拠の確認はできていない。

38 現時点で典拠の確認はできていない。

結果を備えているから。あるいは律儀が等しいから。あるいは区別されないから。あるいは功徳を備えているから。あるいは捨てられるべきものが似ているから。あるいは数が多いから。あるいは頼られないものではないから。世尊は衆会を伴って奉仕された時のみ多くの良い事物でなすので、菩薩に対してなした福徳が大きいのは何故にかと言えば、ある者は、

最高の原因なので最勝の原因と解説される。菩薩から如来、如来から声聞が生じると説かれているから。

と言う。ある者は、

菩提心を回向することを説いているから。

と言う。「羊の車のような円満な想は」とは何かと言えば、清浄なる想をなすべきである。何故にかと言えば、相続の想は円満ではなく、もしその如くならば、「羊の車のように」と言うように述べられる。「仏に対して善根を起こす」とは、仏を対象とする布施などである。

## 7.7 「入定不定印經」<sup>39</sup>

そのように最初の利益の功徳を説いてから今度は、了義と未了義の諸菩薩の特徴を説いたものが、「菩薩はこの五種である」などと述べられる。「仏国土」は、三千の大千である。「戻される」とは、初地の部分から後戻りすることである。「不可説のまた不可説」と言うのは、数の究極に至ることである。それ以上に他の数字の名称はないので、例えば「不可説の不可説は、言説として存在しないのですすべてのものを含んでいる」と説かれている通りである。そうではなくそれ以上に他の数処の名称が述べられている。例えば經典に、

---

39 *Niyatānīyāvātāramudrāsūtra*. Tib. P. No.868, Tsu 66b7-67a6, Chin. T. No.645, pp.699c9-701b20, No.646, p.706b19-707c28. ただし引用の後半は、經典の内容をまとめたものである。Cf. *Bhāvanākrama* III, Tucci 1971, p.25.9-11, 一島1972, p.169.

数処は二種である。転数<sup>40</sup>と各数<sup>41</sup>とである。各数は116である。すなわち、(8) コーティと、(9) アユタ<sup>42</sup>と、(10) ニユタと、(11) ビンバラと、(12) キンカラと、(13) アガラと、(14) プラヴァラと、(15) マヴァラと、(16) アヴァラと、(17) タバラと、(18) シーマと、(19) ヤーマと、(20) ネーマと、(21) アヴァガと、(22) グリガヴァと、(23) ヴィラーガと、(24) ヴィガヴァと、(25) サンクラマと、(26) ヴィサラと、(27) ヴィバジャと、(28) ヴィジャンダと、(29) ヴィシヨダと、(30) ヴィヴァーハと、(31) ヴィバクタと、(32) ヴィカタと、(33) ダラナと、(34) アヴァナと、(35) タヴァナと、(36) ヴィパリヤと、(37) サマヤと、(38) ヴィトールナと、(39) ヘートウラと、(40) ヴィチャーラと、(41) ヴィアティアスタと、(42) アビウドガタと、(43) ヴィシシュタと、(44) ニランバと、(45) ハリタ (harita) と、(46) ヴィクショーバと、(47) ハリタ (halita) と、(48) ハリと、(49) アーローガと、(50) ドリシュターンタと、(51) ヘートウナと、(52) エーラと、(53) ドゥメーラと、(54) クシェームと、(55) エールダと、(56) パールダと、(57) サマターと、(58) ヴィサダと、(59) プラマートラと、(60) アマントラと、(61) ナマ

40 Tib.: khug pa. (1) 一 (eka)、(2) 十 (daśa)、(3) 百 (śata)、(4) 千 (sahasra)、(5) 万 (prabheda)、(6) 十万 (lakṣa)、(7) 百万 (atīlakṣa) となる。ただしこの単位も、Mvy 7822-7825, 7989-7995, 8050-80586の各名称だけでなく実数とも異なっている。ここでは一桁ごとに繰り上がる単位数を七種とすることから、八番目に来る各数の最初の桁は千万となる。

41 Tib.: rkyang [P: brkyang] pa. 『華嚴經』の記述によると「コーティにコーティでアユタとなる」と表現する。これが何を意味するのか不明だが、掛け算を意味するならば、次の桁に移るのには大きすぎてしまう。前出の『俱舍論釈』や『ラリタヴィスタラ』の示すように、それぞれに「大」を加えた100進法と考えるべきだろうか。Cf. 林1993, p.10-11.

42 Tib.: khod khod, Mvy, No.7701, 7827: ther 'bum. 以下のチベット語については、前述のように対応するサンスクリット語だけでなく、チベット語の確認もできていないものが多数ある。したがって、ここに示す桁数についてはGaṇḍavyūhasūtraならびにMahāvvyutpattīに列挙されるものから推定したものである。

43 テキストでは次のビンバラと順番が逆になるが、GaṇḍavyūhasūtraとMahāvvyutpattīの順番に従い、入れ替えた。

44 『経集釈』ならびに『華嚴經』のチベット訳には欠けているが、「入法界品」のサンスクリットによりここに加える。

ントラと、(62) ガマントラと、(63) パラマントラと、(64) ナヒマントラと、(65) ヴィマントラと、(66) パラマントラと、(67) シヴァマントラと、(68) デールと、(69) ヴェールと、(70) ゲールと、(71) ケール (khelu) と、(72) シュヴェールと、(73) ベールと、(74) ケール (kelu) と、(75) セールと、(76) ベールと、(77) メールと、(78) サラダと、(79) ベールダと、(80) ケールダと、(81) マールダと、(82) サムラと、(83) アタヴァと、(84) カマラと、(85) アガヴァと、(86) アタルと、(87) ヘールヴァと、(88) ヴェールヴァと、(89) カシャチャと、(90) ハヴァヴァと、(91) ビンバラと、(92) ミラヴァと、(93) マララと、(94) チャラナと、(95) チャラマと、(96) ダンマナと、(97) プラマダと、(98) ニガマと、(99) パドマと、(100) ウパヴァルタと、(101) ニルデーシャと、(102) ナヴァラ<sup>45</sup>と、(103) サヴァラと、(104) ヴィヴァラと、(105) ダヴァラと、(106) ハヴァラと、(107) アクシャヤと、(108) サンブータと、(109) マママと、(110) アヴァダと、(111) ウトバラと、(112) サンキヤーと、(113) ガティと、(114) ウパガと、(115) アウパムヤと、(116) 阿僧祇転で、その上に七つの基数 (1-7) を加えれば、116は各数に関するものによる。[さらに] 転数は十で、無数量と無量と無辺と無等と不可数と無比と不可思議とアマーピヤと不可説と不可説不可説である。その上に阿僧祇転などから不可説転までの十を加えた十の単位数で、二十にまとめたものを合わせるた136が名称により説かれているから。<sup>47</sup>

45 これと次の項については、サンスクリットを想定することができない。続く項目の近くにあるものを Mvy から拾ってきただけである。

46 『經集釈』では、「転」を付されるのは「阿僧祇から不可説」の10項目とするが、『入法界品』では二番目の「無数量」を除いて「不可説不可説転」を加えた10項目とする。

47 *Buddhāvataṃsakasūtra*, Tib. No.761, Li 266a6-268a2, Chin. No.278, p.586a12-c15, No.279, pp.237b13-238b6; *Gaṇḍavyūhasūtra*, Vaidya 1960, pp.102.28-104.4, Suzuki 1949, pp.132.25-134.18, Tib. P. No.761, Si 172a3-173b5, Jap. 梶山1994, vol.1, pp.226-228. なおこの箇所和訳については、サンスクリットを推定することが不可能な単語もあるのだが、便宜上推定されるサンスクリットをあてはめただけのものである。諸版の比較については、文末の対照表を参照のこと。

同じ喩例を合わすのが、「その如く」などと言われる。聞に関しては、「読経」と読誦と保持をすることである。想に関しては、「如理を作意する」ことである。思惟とは、智慧により精確に分析することである。すべてを理解させることが、残らずに把握することである。そして劣った在り方を修行する者と混ざって修行するので、二つの喩例により説かれている。自性の種を伴って発心をなすので、「大乘の者」である。想が広大なので、「信解」である。広大な行により「読誦し完全に理解する」ことである。そのうち「読誦」は、經典自身である。「理解する」とは、意味を考えることである。「敬う」とは、心の殊勝である。「尊敬」とは、身体と言葉のものである。「努力する」とは、信解である。「下りる」とは、一緒に行をなすことである。「所依」とは、助伴である。「求める」とは、聞くことである。「把握する」とは、対象を損なわないことである。「保持する」とは、経函を与えないことである。そのように成就による恭敬をなすことを説いてから財物による恭敬をなすことを説いたのが、「正しい尊敬により花と」などと述べられる。菩薩の行の最高は、他者を敬うことなので、「輕蔑しない」と言われる。六波羅蜜は、「甚深で広大」である。また「世俗諦の者は甚深であり、勝義諦を説く者たちは広大である」とある者は主張する。二諦を備えた法を捨てないので、「信解」である。「大乘の目的」は、智慧と悲心である。あるいは六波羅蜜である。あるいは甚深で広大な目的である。聖アサンガが、発心などの七種を解説している。聖ナーガールジュナは、六波羅蜜と悲心を解説している。『入楞伽經』には、

五法と [三] 性と八識と無我は二種により残らず大乘に収められる。<sup>48</sup>

と述べられている。そのうち五法は、名称と理由と分別と真如と完全な知恵とあり、所分別と依他起と円成実が自性である。聖マイトレーヤは、

---

48 Cf. *Laṅkāvatārasūtra*, Nanjio 1918, p.224.5-6 (安井1976, p.204): *deśayatu me bhagavān deśayatu me sugataḥ mahāmate deśayiṣyāmi pañcadharmasvabhāvavijñāna-nairātmya-dvaya-prabhedagati-lakṣaṇam/*

ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(3) (望月海慧)

種子と入と成就と次第と結果が大乗である。種姓が種子である。入は発心である。成就是、自他の利益である。次第は、六波羅蜜である。結果は菩提の目的である。それ故に、最勝の乗を説いた相の法により行く衆生に対して、行の目的である無上の在り方となる五種の本質を示す<sup>49</sup>。

と説かれている。「知る」とは、不退転を認識することである。動かないので、「常」である。「帰依処」とは、善趣と解脱である。「菩提心」とは、願と入である。「慈愛」は、利益を望む心である。「悲心」とは、苦を取り除く心である。「六波羅蜜」とは、布施などである。「四依」とは、聞と思と修の三位における法と、目的と、了義と知恵に依存する人と言葉と、未了義の意味と識に依存しないことである。「撰事」とは、布施と悦耳を言うことと利益をなすことと利益が一致することである。自分の道を他に合わせるものが、「他にも」と言われる。

## 7.8 「般若経」<sup>50</sup>

今度は、法を捨てる過失が説かれているので、「正法を捨てること」が説かれている。如何なる人が捨てるのかと言うのならば、「菩薩乗」と言われる。いかなる時に捨てるのかと言えば、「千万那由多の仏」と説かれている。忍を得ず、信解が円満ではない者には仏が見えても大過の業に入ることが存在するので、それが説かれている。「把握する在り方」とは、三輪清淨をとまわらないからである。何を捨てるのかと言えば、「この甚深なる般若波羅蜜」と述べられる。「仏像を造る」<sup>51</sup>とは、「仏のお言葉ではない」と完全に捨てられる。どのように仏像を造るのかと言えば、「衆会のところに来る際も身と心により適切に行わない」と述べられる。「衆会」とは、比丘などである。「来る」

49 現時点で典拠の確認はできていない。

50 *Prajñāpāramitāsūtra*. Chin. T. No.223, p.304c7-16.

51 Tib: ri mo byed pa [SS: ri mi mi byed pas].

とは、法の著者の隠れたものを導くために至ることである。敬恭などが無いので身体により適切に行わない。「法ではない」と捨てられるので、心により適切に行わない。それにより過失が何に成立するのかと言えば、見える法などが、「破慧になる」と述べられている。「智慧を離れている」と言う意味である。「投げる」とは、捨てることである。この三時の一切の仏から生じ生まれるので、「一切智性が投げ捨てられた」のである。それによる結果は何かと言えば、生じてから受けたものに関して「千万那由多年」などと説かれている。無間地獄のみを相続しているので、転生する。「滅する」とは、末劫火などである。「壊される」とは、最初に風から受ける。その時も世間の他の界の地獄に生じるので「大地獄から大地獄に」と述べられるのである。その業が尽きてから上に転じたのが、「畜生と閻魔の世間に」と述べられている。それ故にもし人に生まれても、啞や盲人などに生まれるので「そのように」と述べられるのである。では「大過は無間ではないのか」と言う問いに対して、答えは、それよりも正法を捨てることは大過である。何故かと言えば、「三時の仏の知恵の根本を断じているから」と説いたのが、「五無間と同じとは言えない」と説かれている。これが菩薩の律儀と関係して何が明らかになるのかと言えば、「菩薩乗」と説かれているからである。

## 7.9 『般若経』<sup>52</sup>

今度は、魔の業の損害が説かれるので、「菩薩らの魔の業は」と説かれている。<sup>53</sup>ここで魔とは何か、人とは何なるものか、時とはいつか、害はどのようなものであり、魔の業は何か、それを捨てる方法は何かと言えば、魔は四種である。蘊と煩惱と死魔と天子の魔である。人は、初学者が大乗に新たに入る際である。時は、信と大部分の分別と精進に励み、善友を離れた時である。束縛

---

52 *Prajñāpāramitāsūtra*. 現時点で引用の確認はできていない。  
53 これは經典の引用ではなく、『経集』の編者による言葉である。

を完全に越えるべきなので正しく精進し、中断させられるので、近くに来てそれを越えない。魔の業は、福德を中断させる魔の八つの業と、知恵の二十の中断である。考察する方法は四種である。すなわち、相続の功德に対する考察と光明に対する考察と法の解説に対する考察と供養に対する考察とである。ある者は、「空性による考察を加えた五種である」と主張する。捨てる方法は、完全なる善友に頼る門から捨てられるべきである。

そのうち四魔は、菩薩の魔である。業を二種引用するのが、「魔の業は『般若経』に出ている」と言われる。初学者が大乗に最初に入る際に魔が生じるので「名称に住する」と述べられる。初学者なので言葉だけである。師が名称に執着するので「欺かれる」と言われる。名称はどのようなものかと言えば、「汝が等証覚を得たならば」と述べられている。初学者なので「不退転の見解によりそれらが存在しなくても」と言われる。「不退転の見解により」とは、小乗を悪趣の者たちが楽しみ、恐怖を起こした後も退かないことなどである。「慢心」とは、魔の言葉による我慢である。「輕蔑」とは、侮辱することである。それ故に、

自らを賞讃し他者を責める菩薩は魔により護られ、知恵が少ないと知るべきである。<sup>54</sup>

と言われる。時は四種である。善友を離れてから生じるので、「彼は方便を知らず、智慧を離れ、善友を離れ、善友により尽きない」と述べられている。多くを述べるのが武器であるから。いかなる行為をなすのかと言えば、「声聞地も」などと説かれている。「根本罪」とは、殺生などである。「最も重いこと」とは、一切智性の中断であるので、

地獄は菩提への常住の邪魔をなさないが、声聞と独覚は最高の乗にとつての邪魔となる。<sup>55</sup>

54 現時点で引用の確認はできていない。

55 現時点で引用の確認はできていない。

と述べられる通りである。

## 7.10 『文殊師利神變經』<sup>56</sup>

分別をともなうものに魔が生じることが、「天子よ、業に入る限りの」などと説かれている。「業」とは、身業などである。「入る」とは、考察することである。「魔」とは、煩惱である。例えば「菩薩の煩惱は考察することである」と説かれているから。「願」とは、結果を望むことである。「保持」とは、原因に入ることである。「最勝のものを保持する」とは、最高のものをなすことである。「望む」とは、執着することである。「想」とは、特徴を把握することである。「慢心」とは、事物と見ることである。「完全に考察する」とは、行である。「どこで業に入るのか」と言うことについては、どこでどのようなのかと言うのならば、「菩提心に」などと説かれている。「執着」とは、事物と見ることである。何故に魔の業と解説されるのかと言えば、事物と見ることは束縛なので「解脱で何をを得るのか」と言う言葉である。事物と見ることで、すべてから請われる布施などの行も束縛でしかないので、「布施により慢心をなすこと」となどと説かれている。「慢心」とは、自と他と法を事物と見ることである。「最勝のものを保持する」とは、執着の場所を考察することである。「保持する」とは、怒りなどを考察することである。「受ける」とは、努力することである。「特徴」とは、気が散ることである。「行く」とは、行である。明らかに動くことが生じないことだけを見るので「阿蘭若を喜び、信解と捨をなす」と述べられている。衆生を見失う際に「捨に墮ちる」のである。法衣などの粗末なもので満足するので「少欲」である。多くを求めないので、「知足」である。そのうち少欲により四法を捨てる。すなわち、詐欺と多言と占トと他者の財産を得ることである。知足により、得ようとして獲得することを捨てる。身などの適

56 *Mañjuśrīvikurvāṇaparivartasūtra*. Tib. P. No.765, Ku 274a1-b5, Chin. T. No.589, p.112b2-12.

切な行為をなすので「学んだ」のである。「功德」は十二である。<sup>57</sup>すなわち、食事から成立する三種と衣服から成立する三種と住居から成立する六種である。そのうち多くを食べることの対治が一座食である。それも座の究極と水の究極である。何度も食べることの対治が後で受けないことである。美味しいものに執着する対治が乞食であり、それも何らかの得たもを受け取ることと次第に行くことである。良い服に執着することの対治が糞掃衣であり、それも捨てられ汚されたものに関してである。多[くの衣服]の対治が、三法衣である。柔和[な衣服]の対治が、粗雑なものである。住居の偏執に執着することの対治が、阿蘭若である。屋上に執着することの対治が、屋根のないことである。座に執着することの対治が、随处座である。寺院に執着することの対治が樹木の下である。性行為に執着することの対治が、墓場に住することである。睡眠に執着することの対治が横にならずに座すことある。「器物」が貧しくなるので「減らす」のである。福德の事物の布施などについて、例えば知恵の資糧に対する執着も束縛なので「空性として存在する」などと説かれている。空性などは観である。「無戲論」が止である。「寂靜」は三昧の資糧である。二資糧は仏により与えられるので「お言葉の成就」と述べられている。そのように詳しく解説した意味をまとめたものが、「考察する通りの」などと説かれている。一般と特殊とその両者により行うことが、「考察と尋思と完全な考察」である。言説を四つに考察するので「見る」などである。では初学者がどのように住するようになるのかと言えば、空性は一切相の最勝をとまなうものと知ることを完全に堅固にしてから、資糧が本当のものと考察され、究極の過失が捨てられるので、初学者も批判の門から捨てられるが、さもなければ考察する者たちが強力に捨てようとするならば、有為を批判することにより治すことは難しい。

寂靜の意味を知らず、聞のみに入る人で、福德をなさない下等人に与

---

57 頭陀支の伝承および各支分の詳細については、阿部2001を参照。

えられる。<sup>58</sup>

と聖者自身により説かれており、また、

「存在するものは、真実の事物としては存在しない」と言う否定を上手く尽くしていないと述べられる。正法がこの律から損なわれていると知るべきである。<sup>59</sup>

と聖アサンガ自身により『菩薩地』にも説かれているので、それ故に世尊によっても、

有身見が山と同じであることと、上の増上慢をもつ者が空性を見ることは治し難い。<sup>60</sup>

と説かれている。しかも「方便と智慧の分離は縛られる」と説かれており、また「方便をとまなわな一切の善行も魔の業である」と解説される。それ故に迷乱を迷乱と知ってから次第に捨てることが、「迷乱を捨てること」と述べられている。

これらの種々が迷乱するならば、迷乱しないものは何かと言えば、迷乱するもののみが捨てられることを知れば、迷乱しないことであると知るべきである。<sup>61</sup>

と認められる。

今度は、精進をとまなう者に魔が生じるので、その特徴を述べたものが、「魔の業が精進から生じる」と述べられている。精進と言うものは魔の反対の方向ではないのか。例えば精進に魔が生じると言うのは「何故にかと言えば」と問われ、何らかの宝と蔵をもつものを盗賊が狙い、貧しく貧困な者に敵が何をやるであろうか。そのように「善に向かう精進に魔が生じるが、怠惰に魔が

---

58 現時点で引用の確認はできていない。

59 *Bodhisattvabhūmi*. Wogihara 1971, p.45.20-22, Tib. D. No.4037, Wi 25b5-6. Cf. 相馬1986, p.114.

60 現時点で引用の確認はできていない。

61 現時点で引用の確認はできていない。

ラトナーカラシャーンティ『經集解説・宝明莊嚴論』和訳(3) (望月海慧)

何をするのか」と言うのが「精進を魔が狙うが」と説かれているのである。精進などは何かと言えば、「二を合わせるようなものである」と説かれている。「二」とは能取と所取の本質である。能取と所取は事物として成立するものではないのか。聖經にも、

私は、その時に「鹿の王で獅子の下半身」と言われるものになった。<sup>62</sup>

と説かれており、また、

比丘が夜も起きていれば、鹿と狐の鳴き声を聞く。<sup>63</sup>

と説かれていないのか、どのように能取と所取が否定されるのかと言えば、「何故ならば」と答えて、能取と所取が無始の時より修習の迷乱であるので真実としては適切ではない。論理と聖經により害となったものであり、無我を説く言説の設定は、我と我所を能取と所取と述べているので、過失はない。世間の者たちは無始の迷乱による修習により真実を把握するものを「二を合わせる」と説いている。二を離れているので、「合わせるものが真実」で、「不顛倒」と言う意味である。真実としては得たものを見ることはないので、本当の得たものは「合わせるものが存在しない」。合わされないものを合わせるからである。「無戲論」とは戲論の八極を離れることで、そのように解説をまとめたものが「何れかのものに眼を合わせず」と説かれている。信を備えた魔の業は力により理解されるので、ここでは説かれない。無間の過去の精進を伴わない場合に合わせられる。

## 7.11 『文殊師利神變經』<sup>64</sup>

今度は、魔の害が何をなすのかを説いたのが、見える法として最高の乗を損なうことと、見えない法としての最高の所依を損なうことである。それ故に符

62 現時点で引用の確認はできていない。

63 現時点で引用の確認はできていない。

64 *Mañjuśrīkūṛvāṇaparivartasūtra*. Tib. P. No.765, Ku 284b5-285b1, Chin. T. No.589, p.116a7-b2. Cf. *Bhāvanākrama* III, Tucci 1971, p.22.15-18, 一島1972, p.168.

号を示す在り方により考察されるものを五種により考察してから善友に頼ることにより捨てるべきことが、「天子よ、これらの二十が」と述べられる。八の魔の業と、十八の魔の行と、二十の「魔の業が与えたもの」と述べたものが、それを考察したものとして知られるべきであるから。そのうち「二十は何かと言えよ」、「瑜伽行」と説かれている。瑜伽とは、止と観の三昧である。行は、二種である。心を行じる三昧行と行を受ける行である。この意味の場合に、心が修行を行うこととして認められる。「魔」とは、功德の生起の中断をなすものである。ここでは最高の乗と認められる。「卓越する」とは、「魔の業は最勝である」と言う意味である。魔の業は無量なのか、どのように数えるのかと言う問いは、「何かと言えよ」と述べられる。真実であってもここで「最勝なものをもとめてから解説したものに過失はない」と言うことが、「こうである」と合わされる。そのうち二十種はこうである。把握するものに関して劣った友に頼ることが、「解脱を望み」などと言われる。「輪廻を恐れる」とは、声聞と独覚の乗である。最初と中間と最後が対治などの三種と合わされる。最高の乗の根本<sup>65</sup>は善友なので、それを離れることが「その中断をなす魔」と言われるものである。そのように保持することを離れるならば、結果の最高である成就を離れるので、智慧が方便により尽きないことが二つ。利他の方法を離れることが、「空性をそれぞれ考察し、衆生を失う」ことである。自分自身の煩惱を捨てることを努力するから。自利の方法を離れたのが、「無為をそれぞれ考察し、有為が完全に弱められる」と言われ、「資糧が完全にならない」と言われるものである。そのように知恵は方便により完全に尽きないので、無漏の智慧の原因に誤って入ることが、「禅定から起き、戻ることを求める」ことである。無漏の智慧の原因は三昧であるので、「禅定から起きる」とは、自分の寂靜を求める想などである。「戻る」とは、一切相の最勝をとまなう三昧である。完

65 D: theg pa mchog gi rtsa ba [P: rtsa ba dge ba'i rtsa ba].

全な三昧を離れることが、人に依存することである。劣った想と法に依存して、劣った行になる。そして人に依存した劣った想は二種である。一般的なものに関しては、悲心を離れたものが、「大悲を起こす」と言われる。特別なものに関しては、慈愛を離れたものが「怒り」と言われる。法に関しては、劣った行が二種である。解説に関するものと、成就に関するものとである。そのうち解説に関しては二種ある。劣った智慧に対する修行は、「声聞と独覚の話を説く」などと言われる。何故ならば無我だけを説いているから。智慧を混乱させることに対する修行は、「甚深なる話を隠し」などと述べられる。甚深とは、空性などである。「種々なる話」とは、賭博の話などである。成就に関しては五つ。修行に励まないことと、修行を損なうことに励むことと、修行に従わないことに励むことと、修行を離れることに対する精進と、悪い修行に対する精進である。修行に励まないことは二種である。自らの道を成就することに精進しないことが、「道を知っても」などと言われる。「道」とは、六波羅蜜である。他者を道に導くことに対して精進しないことが、「明らかな精進の賞讃を述べても」などと言われる。「修行しないこと」が、導くことをなさないことである。行を損なうことに対する精進は二種である。自身の行を成就させないものが「善根なども」などと言われる。菩提心は、大乘の道を行くことをなすからである。自身の行を他者に合わせないことが、「観のヨーガを伴って住しても」などと言われる。菩薩は他者への親愛を保持するから。修行に対立することの精進は、「煩惱を残らず尽くすことを求め」などと述べられる。想と行は矛盾しないから。修行を離れることに対する精進は二種である。利他を成就させる方法である悲心を離れることが、「智慧により考察し」などと述べられる。自利を成就させる行であるすべての方を離れることが、「方便をともしなわず」などと言われる。「善巧方便を離れる」と言う意味である。悪い行を精進することは、二種である。精進すべきではないものに対して精進することが、「蔵を求めないが」などと言われる。菩薩の蔵は、六波羅蜜と〔四〕摂事である。「世間の

唯物論者」とは、断見論者である。精進をなすことに対する誤った精進が「多く聞いても」などと言われる。多くを聞くことは精進をすることであっても、法を隠すことは誤ったものなので、誤った精進である。そのように劣ったものを信解する者たちは事物により見るので、「世間の必要なものを管理する」と言われる。本当に完全なる悟りは多くを聞いてから生じるが、事物を把握してから生じるのではないから。劣った行を行う者は劣った助伴に頼るので、「菩薩で法を説くことに」などと言われる。「同じ宿命」とは、大乘の宿命を行じるから。劣った助伴に頼る者は劣ったものに対して放逸するので、「何時であれ帝釈天や」などと述べられる。世間を護るとは、持国天などである。そのようならば、真実の道から退かせる魔の業のこの次第が、存在するだけのものである。

## 7.12 『海慧菩薩所問經』<sup>66</sup>

今度は、他者を軽蔑する過失が解説されるべきである。「菩薩はよい姿で」などと言うことは、他者を軽蔑する原因である。そのうち大きさがよいことが、「よい姿」である。容姿ががよいことが「美しい」のである。「富んでいる」とは、種々なる資産である。財産による「大きな富」は、金などが多いことである。「財産」とは、現前の需要である。「多くの富」とは、金などの種々である。「蔵」は、種々なるものの場所である。「倉庫」とは、それぞれのものの場所である。「血脈」とは、二力を起因とするものなどである。「種姓」とは、クシャトリアなどである。「侍者」とは、使者である。「衆会」とは、随行して生活するものである。「福德」とは、布施などである。「知恵」とは、得ることなどである。「精進」とは、努力することである。「自在天」は、王の地に住す

66 *Sāgaramatipariṣyochāśāstra*. 現時点で典拠の確認はできていない。

67 P: gser (D: gsar).

68 テキストは、“ba ra dva dza” とそのまま音写しているが、意味不明である。ここでは“baladvaja”と読んだ。

ることである。「高慢」とは、自慢することである。「放逸」とは、精進をとまなわぬことである。何を輕蔑するのかと言えば、「菩薩たる者たちは出家に属している」と説かれている。出家者たちは最高の所依なので、

家に住することをなすままに、正しい菩提のこの最高のものを得るが、悟りはいかなるものも先には生じない。未来に生じないし、存在しない<sup>69</sup>と説かれているから。「在家から明らかに出る」とは、「家を捨てる」と言う語である。家に住することは、多くの苦の住居なので、『聖郁伽長者所問經』から非難されるように。「知恵の資糧を完全に求めることに励む」とは、それを広げることである。では二資糧は道でなくても、何故これが最高なのかと言えば、眞実であっても究極の捨を捨てることにより福德の資糧を集めているからである。その如くでなければ、聖經からも、

出家者が財物の布施を与えるように資糧が集まるだろう。それ故に二資糧を備えている<sup>70</sup>。

と認められる。何故に蔑視されるのかと言えば、「肉と血が渴いており」と言われる。非時の食物などを捨てているから。「瘦せている」と言うのは、細長いことである。「貧弱」と言うのは、身体の究極がないことである。「身体が静脈により覆われている」と言うのは、太くても貧弱であるから。そのように何故に身体を求めるのかと言えば、「頭と服に火をつけるように」と述べられ、「とても精進する」と言うことである。「精進を始める」とは、善法を完全に求めることに励むことである。大乘の者たちは、最高の事物であるので「瘦せていて貧弱で顔が悪くて喜んでいないことを知ってから輕蔑する」と説かれている。「外で修行したものであっても、灰の中に火が生じるように、過失をもっている」と言う文章である。それについて「考える」と言うことで想が説かれている。「上手く解説されたものを聞くことを望まない」と言うことにより行

69 現時点で典拠の確認はできていない。

70 現時点で典拠の確認はできていない。

が説かれている。「最低で昏沈している」と言うことは、「総じて放逸となる」と言う意味である。

### 7.13 「海慧菩薩所問經」<sup>71</sup>

今度は中断の四法を説くために、「四とは何か」と述べられている。誤って述べることは、悪い偈頌を唱えることである。これらが菩薩の律儀と関係するものは何が明らかなのかと言えば、すべてのところで「菩薩」と述べられているからであり、ここでも大乘の中断を説いているからであり、さらに信解する聖經を自分の師が相続してからこのように聞いているからである。何故に聖經が認識根拠なのかと言えば、感官を越えているもの (atyantaparokṣa)<sup>73</sup>の対象には直接知覚と推論に入ることがないので、『量釈』にも、

第三の場所に移って、論書を受けることは論理をともなっている。<sup>74</sup>

と出ており、また、

聖經を理解しない論理には諸法は存在しない。仙人たちの智慧たるものも、聖經の先行するものである。<sup>75</sup>

と説かれているので聖典自身を量とすべきである。

『經集解説』で聖典の認識根拠により合わせてから「断絶の法を捨てることは得難い話」を述べた第七章 [を終わる]。

### 文献表 (前号に続く)

阿部2001 阿部慈園『頭陀の研究』春秋社。

71 *Sāgaramatīpariprcchāsūtra*. Tib. P. No.819, Pu 75b4, Chin. T. No.400, p.504a4-6.

72 四とは、(1) 自分の功德を述べること、(2) 他者の功德を誤って述べることと、(3) 我慢を燃やすことと、(4) 怒りを説くことを列挙する。

73 Cf. *Pramāṇavārttikakārikā* 3.314, 316, Miyasaka 1972, pp.158-159, 本多2005, pp.483-484.

74 *Pramāṇavārttikakārikā* 4.51cd. Miyasaka 1972, pp.170-171, 本多2005, p.523.

75 現時点で典拠の確認はできていない。

ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(3) (望月海慧)

- 舟橋1987 舟橋一哉『俱舍論の原典説明 薬品』法蔵館。
- 林1993 林隆夫『インドの数学』中公新書。
- 外園1994 外園幸一『ラリタヴィスタラの研究』大東出版社。
- 本多2005 本多恵『ダルマキールティの『認識論批判』』平楽寺書店。
- 本庄1984 本庄良文『俱舍論所依阿含全表』京都。
- 梶山1994 梶山雄一監修『さとりへの遍歴 上』中央公論新社。
- Koyama 1961 Keichi Koyama, "Das Mathematische in dem Avataṃsaka Sūtra (1)", in *Toyo University Asian Studies I*, pp.47-88.
- Koyama 1964 Id., "Das Mathematische in dem Avataṃsaka Sūtra (2)", in *Toyo University Asian Studies II*, pp.5-14.
- 児山1961 児山敬一「華嚴経・如来光明覚品の数理」『印度学仏教学研究』9-1, pp.48-53.
- 児山1962 児山敬一「華嚴経における数理的なもの(二)」『印度学仏教学研究』10-1, pp.41-46.
- 楠葉1997 楠葉隆徳・林隆夫・矢野道雄『インド数学研究』恒社厚生閣。
- 李2001 李道業『華嚴経思想研究』永田文昌堂。
- Miyasaka 1972 Yusho Miyasaka, "Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan), *Acta Indologica* vol. II, pp.1-206.
- 望月2005b 望月海慧「三種の『三昧資糧論』について」『身延山大学仏教学部紀要』6, pp.49-81.
- 望月2006 同「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(2)」『身延論叢』11, pp.1-50.
- 望月2006b 同「Bodhibhadra の *Samādhisambhāraparivarta* について」『印度学仏教学研究』54-2, pp.70-76.
- Mochizuki 2006 Kaie Mochizuki, "What are major sūtras in later Indian Buddhism?", 『身延山大学仏教学部研究紀要』7, pp.29-71.
- Mvy 柘克三郎『梵蔵漢和四訳対校 翻訳名義大集』1981, 国書刊行会。
- Nanjio 1918 Bunyiu Nanjio, *The Laṅkāvatāra Sūtra*, Kyoto.
- Pradhan 1967 P. Pradhan, *Abhidharmakoshaḥāṣya of Vasubandhu*. Patna.
- 相馬1986 相馬一意「『菩薩地』真実義章試訳」『南都仏教』55, pp.105-126.
- 末綱1957 末綱恕一『華嚴経の世界』春秋社。
- Suzuki 1949 Daisetz Teitaro Suzuki and Hokei Idzumi, *The Gandavyūsa Sūtra*. Kyoto.
- TSD J.S. Negi, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. 16 vols. 1993-2005, Sarnath.
- Tucci 1971 Giuseppe Tucci, *Minor Buddhist Texts Part III*. Roma.

ラトナーカラシャーンティ『經集解説・宝明莊嚴論』和訳(3) (望月海慧)

- 山口1955 山口益・舟橋一哉『俱舍論の原典解明 世間品』法蔵館.  
矢野1980 矢野道雄編『インド天文学・数学集』朝日出版社.  
矢野1987 同「インドの数学」伊東俊太郎編『中世の数学』共立出版株式会社, pp.377-483.  
安井1976 安井広済『梵文和訳入楞伽經』法蔵館.

『華嚴經』「阿僧祇品」「入法界品」における桁数対照表

No	『経集解説』	「阿僧祇品(Tib)」	「同左(Mvy)」	「入法界品(Tib.)」	「入法界品(Skt.)」	「入法界品(Mvy)」
1	(gcig)					gcig (eka)
2	(bcu)					bcu (daśa)
3	(brgya)		brgya (śata)			brgya (śata)
4	(stong)		stong (sahasra)			stong (sahasra)
5	(khri)					
6	('bum)					
7	(sa ya)					
8	bye ba	bye ba	khri bye ba (koṭi)	bye ba	koṭi	bye ba (koṭi)
9	khod khod	khod khod	ther 'bum (ayuta)	khod khod	ayuta	ther 'bum (ayuta)
10	thad dgu	thad dgu	khrag khrig (niyuta)	thad dgu	niyuta	khrag khrig (niyuta)
11	khrag khrig	khrig khrig	bkrigs (viṃvara)	khrig khrig	bimbara	dkrigs (viṃvara)
12	thams thams	thams thams	gtsams (kaṃkara)	thams thams	kaṃkara	gtams (kaṃkara)
13	myad myid	med med	yid yal (agāram)	myed myed	agara	yid yal (āgāra)
14	gang ya	gang ya	mchog yas (pravara)	gang ya	pravara	mchog yas (pravara)
15	ban bun	ban bun	ban bun (mavara)	ban bun	mapara	ban bum (savara)
16	phyar phyur	phyar phyur	phyur phyur (avara)	phyar phyur		avara (phyar phyur)
17	lcag lcig	lcag lcig	phyad phyod (tavara)	lcag lcig	tapara	phyad phyod (tavara)
18	byang bying	byang bying	mtshams yas (simā)	byang bying	sima	mtshams yas (sima)
19	chem chem	chem chem	zam zim (hūma)	chem chem	yāma	zam zim (poma)
20	phyal phyol	phyal phyol	phyal phyol (nema)	phyal phyol	nema	phyal phyol (nema)
21	khyad khyud	khyud khyud	rig sdom (avaga)	khyud khyud	avaga	rig sdom (ārāva)
22	zer zer	zer zer	zar zer (mīgava)	zar zer	gṛgava	zar zer (mīgava)
23	khrib khrib	khrib khrib	khrib khrib (viraga)	khrib khrib	virāga	khrib khrib (vināka)
24	ya gangs	ya gangs	bsgyur yas (vigava)	ya gangs	vigava	bsgyur yas (vigava)

25	cho ma	cho ma	sbar yas (samkrama)	cho ma	samkrama	sbar yas (samgrama)
26	khram khrim	khram khrim	'phro yas (visara)	khram khrim	visara	'phro yas (visara)
27	nab nub	nab nub	nab nub (vijambha)	nab nub	vibhaja	nab nub (vibheja)
28	sang sang	sang sang	thab thib (vijāga)	sang sang	vijandha	thab thib (vijagha)
29	brgyud yas	brgyud yas	rgyud yas (visota)	brgyud yas	visodha	brgyud yas (visoda)
30	gtang yas	btang yas	khyad phyin (vivāha)	gtang yas	vivāha	khyad phyin (vivāha)
31	bkra yar	bkra yar	bkra yas (vibhakti)	bkra yar	vibhakta	bkra yar (vibhakta)
32	gsa' yas	gsa' yas	grags yas (vikhyāta)	gsal yas	vikhata	grags yas (vikhata)
33	mi mtshungs	mtshungs med	gzhal bgrang (tulana)	mtshungs med	dalana	gzhal bgrang (tulana)
34	lam lum	lam lum	gzhal dpag (dharāna)	lam lum	avana	gzhal dpag (varaṇa)
35	yam yom	yal yol	yal yol (vipatha)	yal yol	thavana	yal yol (vivara)
36	khral khrol	khral khrol	'khrul yas (viparya)	khrol khrol	viparya	gzhal yas (avana)
37	thad thud	thud thud	'phags yas (samarya)	thud thud	samaya	rgod yas (thavana)
38	bsam phyod	bsam phyod	rnam dpyod (vitūrṇa)	bsam phyod	vitūrṇa	'khrul yas (viparya)
39	brang breng	brang breng	rgyad yas (hevara)	brang brang	hetura	'phags yas (samarya)
40	brgod yas	brgod yas	brgod yas (vicāra)	brgod yas	vicāra	rnām phyod (vitūrṇa)
41	bsngo yas	bsngo yas	bsko yas (vicasta)	bsngo yas	vyatyasta	rgyas yas (hevara)
42	zang yag	zang yag	zang yag (atyudgata)	zang yag	abhyudgata	bgrod yas (vicāra)
43	'phro bkya	'phro bkya	bstan yas (visīṣṭa)	'phro bkya	visīṣṭa	bsko yas (vyatyasta)
44	rtse 'phyo	brtse 'phyo	stobs yas (nevala)	rtse 'phyo	nilamba	zang yag (atyudgata)
45	yong tan	yod bian	'phrog yas (hariva)	yong tan	harita	bstan yas (visīṣṭa)
46	'brug g-yos	brug g-yos	brug gyos (vikṣobha)	brug g-yos	vikṣobha	stobs yas (nivala)
47	sang yal	sang yal	rmong yas (halibhu)	sang yal	halita	'phrog yas (haribha)
48	mthing yug	thing yug	thing yag (harisa)	'thing yug	hari	brug yas (vikṣobha)
49	yid 'phyo	yid 'phyo	shugs 'phyo (heluga)	yid 'phyo	āloka	rmong yas (halibha)
50	nab neb	nab neb	mtha' yas (drabuddha)	nab neb	śrīṣṭānta	thing yug (hari)

51	khrig thams	khrig thabs	phyin phyod (haruṇa)	khrig thams	hetuna	shugs sbyong (aloka)
52	yal yal	yol yol	gzungs sbyin (maluda)	yal yol	ela	yid 'phyo (dṛṣṭānta)
53	bgrang yas	bgrang yas	bzod yas (kṣamuda)	bgrang yas	dumela	phyin phyed (haduna)
54	thug yal	thug yal	thal yas (elada)	thug yas	kṣemu	thal thal (ela)
55	shang shang	shang shang	tshad yas (maluma)	shang shang	eluda	yal yal (dumela)
56	yag yag	yag yag	rtag yas (sadama)	yag yag	bhāluda	bzod yas (kṣepu)
57	tham thim	tham thim	dga' yas (vimuda)	tham thim	samatā	thal yas (elada)
58	rlom bsnyal	brlom brlal	tshad myas (vaimātra)	rlom brnyal	visada	thal yas (māluda)
59	gzhal 'phyos	gzhal 'phyos	gzhal 'phyos (pramātra)	gzhal 'phyos	pramātra	rtogs yas (samatā)
60	gzhal yal	gzhal yal	gzhal yas (sumātra)	gzhal yal	amantra	dga' yas (vimada)
61	gzhal med	gzhal med	gzhal thims (bhramātra)	gzhal med	bhramantra	gzhal 'phyos (pramātra)
62	gzhal 'khor	gzhal 'khor	gzhal 'khor (gamātra)	gzhal 'khor	gamantra	gzhal yas (amantra)
63	gzhal thim	gzhal thim	gzhal med (namātra)	gzhal thim	namantra	gzhal thum (bhramantra)
64	gar gzhal	gar gzhal	gar gzhal (hemātra)	gar gzhal	nahimantra	gzhal 'khor (gamantra)
65	gzhal sangs	gzhal sangs	gzhal sangs (vemātra)	gzhal sangs	vimantra	gzhal med (namantra)
66	gzhal thag	gzhal thag	gzhal thag (paramātra)	gzhal thag	paramantra	gar gzhal (nahimantra)
67	gzhal phul	gzhal phul	gzhal phul (śivamātra)	gzhal phul	śivamantra	gzhal sangs (vimantra)
68	gzhal gzhi	gzhal gzhi	yal 'das (ela)	gzhal zhin	delu	gzhal thag (paramantra)
69	'phyo 'gyur	'phyo 'gyur	dus rlabs (vela)	'phyo 'gyur	velu	gzhal phul (śivamantra)
70	nyar nyer	nyar nyer	nyar nyer (tela)	nyar nyer	gelu	yal (elu)
71	phayg phyig	phayg phyig	phyag phyig (gela)	phayg phyig	khelu	dus rlabs (velu)
72	zal zul	zal zul	zal zul (svela)	zal zul	nelu	phyag phyig (gelu)
73	sal sal	sal sal	gtang yas (nela)	sal sal	bhelu	zal zul (śvelu)
74	g-yo ldeg	g-yo ldeg	sal sal (kela)	g-yo ldeg	kelu	btang yas (nelu)
75	phan phun	phan phun	yad yod (sela)	phan phun	selu	nyar nyer (bhelu)
76	brnang ya	brnang ya	phyol yas (phela)	brnang ya	pelu	sal sal (kelu)

77	rem 'grol	rem 'grol	'phrad yas (mela)	rem 'drol	melu	yad yod (selu)
78	rdzi ngad	rdzi dang	brjod yas (saraṭa)	rdzi ngad	saraṭa	phyol yas (pelu)
79	rdzi rdul	rdzi rdul	rdzi phyod (meruda)	rdzi rdul	bherudu	'phrad yas (melu)
80	phun yol	phun yol	rdzi phyod phyod (kheluda)	phun yol	kheludu	brjod yas (sarala)
81	ngad ngad	ngad ngad	ma gzhal (mātula)	ngad ngad	māludu	rdzi phyod (merudu)
82	bgrang rtsi	bgrang rtsi	dpag 'byams (samula)	bgrang rtsi	samula	rdzi phyod khyod (kheludu)
83	zab bgrang	zab bgrang	zab 'grang (ayava)	zab grang	athava	ma gzhal (māludu)
84	dga' brkyang	dga' brkyang	dga' brkyang (kamala)	dga' brkyang	kamala	dpag 'byams (sambala)
85	gzhung mda'	gzhung 'dal	brtag yas (magava)	gzhung 'dal	agava	zab bgrang (apava)
86	'khrul chad	'khrul phyad	bsgral yas (atara)	khrug phyed	ataru	dga' brkyang (kamala)
87	'ol phyod	'ol phyod	'od phyod (heluya)	'ol phyod	heluva	brtags yas (ataru)
88	gdab yas	'dab yas	gdab pas (veluva)	gdab yas	mirahu	'ol phyod (heluvu)
89	gcal yas	gcal yas	cha tshogs (kalāpa)	gcal yas	carāṇa	cha tshogs (kaśaca)
90	bgrang yas (=53)	bgrang yal	bgrang yal (havava)	bgrang yas	dhamana	bgrang yas (havava)
91	byim 'phyo	byim 'phyo	bsnyad yas (vivara)	byim phyo	pramada	ljab ljab (havala)
92	ya me	ya me	rab yangs (navara)	ya me	nigama	bsnyad yas (vivara)
93	bsnyal yas	brnyal yas	bsnyal yas (malara)	bsnyal yas	upavarta	gzugs yas (bimba)
94	ldab ldeb	ldab ldeb	mchog ldan (savara)	ldab ldeb	nirdeśa	lhun yas (mirava)
95	'ban chad	phan chad	lhun yas (meruṭu)	'ban chad	akṣaya	gdab yas (carāṇa)
96	phang phung	phang phung	rgod yas (camara)	phang phung	saṃbhūta	mtha' 'byam (carama)
97	khye'u chang	khye'u tshang	'dzin yas (dhamara)	khye'u tshang	mamama	lang ling (dhavara)
98	zhung zung	zhung zung	dga' 'byam (pramāda)	zhung zung	avada	'dzin yas (dhamana)
99	mchog yol	mchog yal	dpal bral (vigama)	mchog yol	utpala	dga' 'byam (pramāda)
100	mtha' brtul	mtha' rdul	mtha' rtul (upavarta)	mtha' rtul	padma	dpag bral (nigama)
101	yun 'gyangs	yun 'gyangs	nges bstan (nirdeśa)	yun 'gyangs	saṃkhyā	mtha' rtul (upavarta)
102	bun lob	bun lob	mi zad pa (akṣaya)	bun lob	gati	nges bstan (nirdeśa)

103	lam lob	lam lom	legs 'byung (sambhūta)	lam lob	upaga	mi zad pa (akṣaya)
104	bsnyad yas	bsnyad yas	nga med (amama)	bsnyad yas	aupamya	legs 'byung (sambhūta)
105	lang ling	lang ling	bsam yas (avānta)	lang ling		nga med (amama)
106	ljab ljib	ljab ljib	brlabs yas (utpala)	ljab ljib		gsal yas (avada)
107	mi brtsal	mi brtsal	mchog yas (padma)	mi brtsal		brlabs yas (utpala)
108	'byam yas	'byam yas	grangs 'byung (saṃkhyā)	'byam yas		mchog yas (padma)
109	nga 'grang	nga 'grang	rtogs 'gro (gati)	da 'grang		grangs 'byam (saṃkhyā)
110	smos yas	smos yal	rmos yal (upagama)	smos yas		smos yas (upagama)
111	bkra chal	bkra chal		bkra' chal		rtogs 'gro (gati)
112	lo rgyas	lo rgyas		lo rgyas		dpe yas (upamya)
113	'bum rdib	'bum rdib		bum 'dib		
114	gam gum	gam gum		gang gum		
115	la lo	la lo		la lo		
116	bgrang 'phyos	bgrang 'phyos	bgrang du med pa (asaṃkhyena)	bgrang 'phyos	asaṃkhyena	bgrang du med pa (asaṃkhyeya)
117	bgrang 'phyos la bsgres	bgrang 'phyos la bsgres	bgrang du med pa la bsgres (asaṃkhyenaparivarta)	bgrang 'phyos la bsgres	asaṃkhyenaparivarta	bgrang du med pa la bsgres (asaṃkhyenaparivarta)
118	dpag yas	dpag yas	dpag yas (aparimāṇa)		apramāṇa	tshad med pa (apramāṇa)
118 -2		dpag yas la bsgres	dpag yas la bsgres (aparimāṇaparivarta)			tshad med pa la bsgres (apramāṇaparivarta)
119	yal phyong	yal phyong			aparimāṇa	dpag tu med pa (aparimāṇa)
120		yal phyong la bsgres			aparimāṇaparivarta	dpag tu med pa la bsgres (aparimāṇaparivarta)
121	mu yal	mu yal	mu med (aparyanta)		aparyanta	mu med pa (aparyanta)
122		mu yal la bsgres	mu med pa la bsgres pa (aparyantaparivarta)		aparyantaparivarta	mu med pa la bsgres (aparyantaparivarta)

123	bgrang yol	bgrang yol	thug med (asamanta)	asamanta	thug med (asamanta)
124		bgrang yol la bsgres	thug med la bsgres pa (asamantaparivarta)	asamantaparivarta	thug med pa la bsgres (asamantaparivarta)
125	mi 'jal	mi 'jal	brtsi yas (agapaniya)	agapaniya	brtsi yas (agapeya)
126		mi 'jal la bsgres	brtsi yas la bsgres pa (agapaniyaparivarta)	agapaniyaparivarta	brtsi yas la bsgres (agapeyaparivarta)
127	bsam phyod	bsam phyong	gzhal du med pa (atulya)	atulya	gzhal du med pa (atulya)
128		bsam phyong la bsgres	gzhal du med pa la bsgres pa (atulyaparivarta)	atulyaparivarta	gzhal du med pa la bsgres (atulyaparivarta)
129	mtha 'byam	mtha 'byam	bsam gyis mi khyab pa (acintya)	acintya	bsam gyis mi khyab pa (acintya)
130			bsam gyis mi khyab pa la bsgres pa (acintyaparivarta)	acintyaparivarta	bsam gyis mi khyab pa la bsgres (acintyaparivarta)
131	dpag thag	dpag thag	bgrang yol (ameya)	amāpya	gzhal gyis mi lang ba (amāpya)
132		dpag thag la bsgres	bgrang yol la bsgres pa (ameyaparivarta)	amāpyaparivarta	gzhal gyis mi lang ba la bsgres (amāpyaparivarta)
133	brjod du med pa	brjod du med pa	brjod du med pa (anabhilāpya)	anabhilāpya	brjod du med pa (anabhilāpya)
134	brjod du med pa la bsgres	brjod du med pa la bsgres	brjod du med pa la bsgres pa (anabhilāpyaparivarta)	anabhilāpyaparivarta	brjod du med pa la bsgres pa (anabhilāpyaparivarta)
135	brjod du med pa i yang brjod med pa	(brjod du med pa i yang brjod med pa)		anabhilāpyā-nabhilāpya	brjod du med pa i yang brjod med pa (anabhilāpyānabhilāpya)
136		brjod du med pa i yang brjod med pa la bsgres pa	brjod du med pas yang kyang brjod med pa la bsgres pa (anabhilāpā-nabhilāpyaparivarta)	anabhilāpyā-nabhilāpyaparivarta	brjod du med pas yang kyang brjod med pa la bsgres pa (anabhilāpyā-nabhilāpyaparivarta)